日本クリスチャン・アシュラム連盟

イエスは主なり

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　132号

『朝早くまだ暗いうちに』

鍋倉　勲

「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」（マルコ一章三十六節）

神学校を卒業して東京のＯ教会の副牧師として就任し、最初に受けた訓練は早天祈祷会でした。Ｉ兄弟は職場に出かける前に早天を休んだことはありませんでした。結婚して品川の株分け開拓伝道に派遣された時も、援祷を受け、朝毎に新米の牧師のために熱心に祈る信徒の群がありました。五年間の米国留学を終え、福岡のＴ教会に赴任し、傍ら神学校で実践神学を担当することになりました。初代牧師がW.M.ギャロット博士で、優れた聖書学者であると同時に、神との交わり、祈りを実践し、スタンレイ・ジョーンズ博士と親交があり、教会の祈祷会・教会アシュラムを大切にする教会でした。22年余に亘るＴ教会の牧師時代は試練や失敗もありましたが、最大の喜びは朝毎に信徒と共に神の御声に耳を傾け、神の臨在の中に生かされる恵みを経験した事でした。1994年４月、西南女学院大学保健福祉学部が開学され、招かれて早10年になります。ここでの働きは、開拓伝道に似ています。宗教主事の任にありながら、霊的に枯渇する危険性をしばしば感じます。学院では月２回有志の早天祈祷会が生まれました。その中で、アシュラム運動への積極的参加が私の支になりました。何より、スタンレー・ソョーンズ博士の鞄持ちとして、２週間寝食を共にし、早朝、神との交わりを実践して居られた姿に接しましたが、それはまさしく冒頭の聖句を想起させました。

マルコ一章三十五節の前後には、イエスの激しい宣教活動が書かれています。

私自身多忙な生活に追われている昨今、イエスのダイナミックな宣教活動の原動力は何処にあったのかを思わされます。現今の教会に欠けているものは何か。冒頭の聖句はそれを示しています。

主よ、朝早く、沈黙の内に、神の初めの愛に立ち返り、主の臨在に浸り、神ご自身と親密に結ばれることを求めて祈る日々でありますように切に願います。

（西南女学院大学宗教主事）

霊想

「キリストのからだを建てる」（エペソ4の12）

更生教会牧師
原田　謙

アシュラムは、神対私とうい個人の信仰に主要点がおかれていますが、本日は教会と信徒の関係について学びたく存じます。教会は、誰々先生の教会といったように牧師中心の教会形成があり、兎角牧師中心になりかねません。或は逆に役員或は信徒中心の教会があり、雇われ牧師でその力量を問われるといった形になったりします。或教会に一人の教師が招かれ、役員が皆最前線に座して礼拝が持たれました。新任の教師は、この教会は熱心な役員で希望があると期待した由です。ところが、三ヶ月たったら前列の役員は皆いなくなった。この牧師ならまかせることが出来ると安心して出なくなった。との事。受洗して間もなくの人が「どの位通えばあの役員のように出なくても良いようになるのですか」と尋ねた由。これでは舟で云えば和船のようなもの、どれだけ牧師の力量があるか、教勢が上がれば良い牧師、上がらなければ…、となりかねない。ドーナツ現象で人口増加地域で急成長する教会があり、過疎化地域で延びない教会がある。それで牧師を評価することは出来ない。大切なことはどのような教会形成が行われているかです。

プロテスタントでは万人祭司が云われている。キリストが教会の頭、我々は手、足です。しかしそこにはそれぞれ働きの分野がある。エペソ四の十一には「そして彼は、ある人を使徒として、ある人を牧師、教師としてお立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ」（口語訳）るのだとあります。この「ととのえる」というのは、或事柄や人をそのあるべき状態にもって行くこと、マルコ一の十九にはペテロとヨハネとが舟の中で網を繕っている…」とあります。これが整えるのです。牧師の仕事は、信徒を信仰的、霊的にあるべき状態に引き上げ、繕って牧師と信徒たちが共に教会を形成してこそあるべき姿なのです。主を三度否んだペテロに対してイエスは何と云っておられますか「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」（ルカ二十二の三十一）と云われ、「ヨハネの子シモンよわたしを愛するか」（ヨハネ二十一の十五）と三度問いかけてペテロを整えたのです。私たちはどのように神のみ前にととのえられるべきでしょうか。主のみ前にもう一度出ることが必要です。

もう一つ大切なことは礼拝にはげむということです。「安息日を覚えてこれを聖とせよ」（出二十の八）とありこれが信徒にとって大切です。礼拝そのものも大切ですが、礼拝が我々の生活の中心になっていなければならないということです。礼拝のために生活がととのえられ、礼拝によって信仰が整えられて後、派遣されて世にあって証を立てて行くのです。飛行機は飛ぶためにあります。更に目的に到着すること、又ととのえられて次ぎの仕事に従事する。我々の礼拝は翼を休めることが第一にある。更にはととのえられることが必要であります。格納庫に入ってもう一度飛び立てるように、飛び立って一週の中でキリストの全権大使として活躍することが必要です。（Iコリ五の二十）とあります。礼拝から我が家に帰るだけでなく、我が家に派遣されて行く。それが我が家に帰ってぼやくのでは、新しい人に福音を伝えようとしても証しが立ちません。パウロは「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられること」（ピリピ一の二十）と云っています。家が末信者の家庭であったら、教会こそがわが家で、自身の家に派遣されていくことの自覚が必要です。信徒は牧師によりみ言葉によってととのえられる。牧師も整えるわざのために祈りをもってするのです。神学者エミールブルンナーの「信徒伝道の重要性」の中で次の様に語っています。①どんな小さな教会も教職より信徒の方が多い（数の問題）②質の面で信徒は優れたものを持っている。信徒は教職の出来ない証をすることが出来る。困難の中に主を見上げて輝いているサラリーマン信徒、嫁姑の複雑な関係の中で輝いている婦人のあかしには説得力がある。君のその喜びと希望の原因は何か…。私の内にキリストがいまして、感謝に満ちていると、多くの人をクリスチャンに導くにいたる。

教会は皆でオールを漕ぐエイトのボートのようなもの、皆で漕いで行くものでありたい。牧師は一定方向を示す役割をする。お互いにととのえられて行くものとされたい。ここに教会の姿があります。愛によって育てられ、分に応じて働く私たちでありたく存じます。栄光主にあれハレルヤ。

証　城北アシュラムの恵み

やすらぎ教会
小山　希羊子

「池の上キリスト教会」は入ってすぐ聖水をたたえたような噴水があり、礼拝堂には金銀の飾り、そして天井にも床にも星形のデザイン…と立派でエレガントな建物です。椅子一つとっても、壇上の土台の寄木作りのような作りを見ても実によくできています。私達もキリストのからだとしてこのように隅々まで主のよき作品として生きづいていたいのです。今年のテーマは「愛のうちに育てられ」という神の愛にあって信仰的に大人になっていくという学びでした。私は受洗して二十四年、一応は天に属する身分を半分は受けたようなものですが、残る後半生を確固とした歩みを進めてゆきたいと思い、今回のアシュラムに参加しました。エペソ人の手紙三・四章を拝読して黙想している内に、「あなたの身分、（霊的）経済・将来も祝される」と主に励まされる思いがしました。そして安心して今目指している舞踊の趣味に専念して取り組めるような気がしました。少し落ちつきが足らないので自分でも問題に思え、冷静さを養うためにどうしたらいいか分団の「祈りの細胞」の時に考えてみることができました。それは短くても小刻みに「静聴の時間」を取り入れることのように思えました。つまり御言葉を心の灯台として守っていくことです。一日のうちに何回か御言葉を読んだり、乗り物の中で黙想することでよい判断を思いついたり、忘れていたことを思い出したりして助かる事があります。

アシュラムの開催された日は、心満たされた幸せな気持ちでいっぱいでしたが、その数日後には「恵み」と「試練」と両方到来しました。「恵み」は知人が急に教会を初めて訪ねて下さったこと。「試練」は自分の意のままにしていたら聖書的ではない方に行ったことです。よい学びを治めた後の難しいテストのようでした。私は試練に勝てたとは思えませんでしたが、「全てを感謝しなさい」という御言葉に支えられて神の愛の深さに感謝しつつ、神様から「私のステキな小作品」と言っていただけるようゴールを目指してこれからも歩んでいきたい！　と思っています。池の上教会の皆様有難うございました。

第34回城北アシュラム報告

飯島　紀子

二〇〇三年二月十一日、城北アシュラムが日本ホーリネス教団、池の上キリスト教会に於て、一日アシュラムとして開催されました。

今回は、エペソ人への手紙四章十六節より「愛のうちに育てられ」と題して、幸いな集会が持たれました。

九時半より受付が始まり、準備祈祷集会を持ち、十時より島津牧師のオリエンテーションと開心の時、続いて十の分団に分かれての第一回の祈りの細胞、今回は個人的なニードだけでなく、教会が愛のうちにいかに建て上げられてゆくかという教会のニードも出されて、大変、良かったと思いました。

チャペルに於て、全員集合の記念写真の撮影の後、地下のコイノニアホールに於て昼食となりました。寒い日でしたが、姉妹たちの手造りの豚汁に身も心も暖まり、教会毎の自己紹介により良き交わりの時を持ちました。午後一時より、石川深香子師の導きにより、エペソ書、二章三章より「静聴の時」を持ちました。

続いて、原田謙師による「福音の時」が持たれました。教会は、「二、三の者が我が名によって集まる所に我も居るなり」と言われる主イエス・キリストの満ち満ちておられる所でありキリスト御自身が一人一人を育て上げ聖徒として整えて、奉仕の働きをさせ、キリストの体としての教会を建て上げて下さる。私たちも①祈り②御言葉を聞く、③礼拝を捧げることによってキリストの体なる教会をキリストの愛のうちに育てられ、建て上げる者とさせていただきましょうと力強くお勧め下さいました。そして、二回目の祈りの細胞に於て、ニードに答えられた恵みの証詞をたくさん伺うことができて、主のみ名を崇めました。最後に、島隆三牧師による「充満の時」でエペソ五章十八節より、御霊に満たされなさい。私たちの内にお住み下さる聖霊を確信し歩んで行く時、主に喜ばれる歩みを私たちはすることが出来ることを語って下さいました。各々、自我を明け渡してみ霊をいただいて解散することができました。

参加者　七十六名、献金は十参万六千二百十円となり、日本アシュラム、関東アシュラムに各々献金させていただくこととしました。又、若い人達がアシュラムに参加して下さるように祈りが始められました。

感謝のうちに、御報告とさせていただきます。

訃報　山岸　英一兄召さる

当誌に毎回「はれるやさん」谷牧子の名で、ウィットに富んだ漫画を提供して下さっていた同兄が、03年3月5日、突如心臓麻痺状態で召天されました。6(木)―7(金)日本基督教団松沢教会礼拝堂で葬儀が執行されました。同兄のご奉仕に感謝

すると共に、所属のやすらぎ教会（今井壽牧師）とご遺族の上に主の御慰めを祈ります。

東京新生　アシュラム報告

横山　義孝

私たちの東京新生教会は、神様の深いご摂理のもと、一九八八年、日本基督教団の認可神学校である東京聖書学校が当東久留米市に所在していましたとき開設されました。五年後現在地に会堂が与えられてすぐ、教会アシュラムを開始いたしました。今年第十回です。プログラムは〇三年二月二十二日（土）夕刻七時から「開心の時」（開会礼拝を兼ねて）八時から九時「グループの祈り」(1)、を持ち、互いのニードを分ち合い、互いの課題のために祈りました。十時から翌朝八時迄「連鎖祈祷」。これには会堂で祈るもの、家庭で時間と場所を聖別して祈るもの、それぞれの希望を登録した後、連鎖祈祷になります。初めて参加者のために祈りの課題、読む聖書テキストを記し（必要な人のために）たガイダンスを配布しておきます。

翌二十三（日）午前九時四十五分から十時二十分迄「静聴の時」。定められたテキストにより啓示を受けたこと、また昨夜の連鎖祈祷の恵みを分ち合います。十時三十分より公同礼拝メッセージ「イエスは主である」（Iコリント十二の三・ヘブライ十二の二十五―二十九）。その前に日本基督教会天門教会会員藤井昇兄（関東アシュラム委員）の立証。当教会ではアシュラム開催にあたり、必ず他教会のアシュラムの友をゲスト立証者としてお迎えいたします。同兄は誠実な教会員として、またアシュラムの恵みに生きる感謝と喜びを証しされました。十二時より午後一時は楽しい昼食、交わりの時、一時から二時「グループの祈り」(2)当日の礼拝に出席、プログラムに新たに加わるかたのために、グループを一つ新設します。二時から三時が「充満の時」、感謝にあふれるもの、新たな悔い改めに導かれているもの、決意を新たに喜び進むもの、新しい年の教会生活、信仰生活、そして宣教、伝道、救霊諸活動の前進のために、最後に二人一組になって祈り「イエスは主である」の三本指の挨拶を唱和して恵みの内に散開しました。

当教会はアシュラムを「こころの友伝道」と合せて、教会形成の柱にしており、日々の交わりにおいてフィリピ四の六―七の御言葉に立ち、アシュラムの祈りによって支えられています。その恵みを一人一人が日々味わっています。ハレルヤ

各地区アシュラム予定

●第41回関東アシュラム
とき・'03年9月22日(月)―24(水)
とき・山崎製パン箱根山荘
助言者・島　隆三師

●第37回関西アシュラム
とき・'03年10月12日(日)―13(月)
ところ・国際交流セミナーハウス皇子が丘荘
助言者・アシュラム委員

●第8回富山アシュラム
とき・'03年10月6日(月)―7(火)
ところ・インテックス大山研究所
助言者・横山義孝師

編集後記

第132号をお届けいたします。各地区、各教会からのニュースをお待ちしております。（Y）

東京都目黒区中央町1の21の10
碑文谷教会気付
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一―四五五八
理事長　大石嗣郎
編集人　横山義孝
定価　一部60円　〒80円